

# 命守るヘルメット 母の訴え

## 自転車事故で14歳娘亡くす



講演する秋田さん。あゆみさんの「笑顔の写真」を待ち受け画面にした携帯電話を握りしめ、母に語りかけた（昨年11月、岡山市内で）

## 講演100回「最後の笑顔」励み

10年前の交通事故で、自転車に乗っていた中学生の娘（当時14歳）を亡くした母親が子どもや若者に事故の恐ろしさを伝える講演活動を全国で続けている。岡山市南区の秋田明美さん（57）。欠かさず語りかけるのは、娘が事故時にかぶっていたヘルメットで頭を守ることの大切さ。無念の思いは消えないが、娘が見せた最後の笑顔（V）を励みにしている。

（浜端成貴）

「ヘルメットをかぶって、集まった学生ら約50人を前に、秋田さんが静かに語りかけた。事故が起きたのは2011年11月、岡山市内の大学に。2年12月7日、塾に向かう長女のあゆみさんを自宅か

ら見送った。いつも通りの笑顔で、「行ってきまふっ」とおどけた口調で出て行った。

数時間して「今から帰るね」とメールが届いたとき、姿が見えない。警察から連絡があり、自転車で横断歩道を渡っていたところを車にはねられ、意識不明の重体だと聞かされた。

病院で対面したあゆみさんは目を閉じたままだった。目立ったけがはなかったが、頭を強く打っていた。医師から「一手の施しようがない」と告げられ、言葉を失った。

当時、あゆみさんが通う中学校では登下校時の自転車用ヘルメット着用を生徒に求めており、あゆみさん

も着用していた。登下校以外では特にルールはなかったが、秋田さんは「かぶるよう注意していれば」と悔い、自分を責めた。

意識が回復しないまま迎えた年末、あゆみさんが小学校から続ける剣道の仲間が病院に見舞いに来てくれた。きやかに語り合う中、一人がはよ剣道しようや。寝とらんと起きないかんが」と声をかけた。その時、それまで何の反応も示さなかったあゆみさんが満面の笑みを浮かべた。

みんなで「わっ」と喜んだ。秋田さんはあふれる涙をぬぐいながら、携帯電話のカメラに向けて写真に収めた。「あゆみはきつと目を覚ます。正月は一緒に過ごせる」。そう信じたが、翌日に容体が急変。あゆみさんは脳死状態となって回復することなく、18年1月



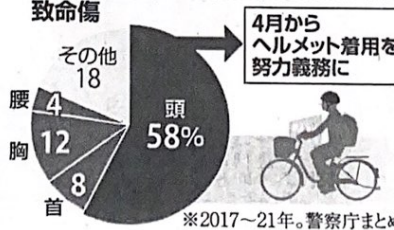
事故後、意識不明の状態で入院中、仲間の励ましに笑顔を見せたあゆみさん（秋田さん提供）

## 全年齢に着用努力義務 4月から

自転車乗車時のヘルメットを巡っては、13歳未満の児童に着用させることを保護者の努力義務としている道路交通法の改正で、4月からは自転車に乗る人全員に努力義務が課される。未着用でも罰則は設けませんが、全世代を対象とする条例は東京都や愛媛県など一部の自治体にとどまっており、警察庁は、法律に明記することで着用率を向上させたいとしている。

警察庁によると、2021年までの5年間に自転車乗車中の事故で死亡した2145人のうち、約6割の1237人が頭部に致命傷を負った。ヘルメットを着

## 自転車乗車中の事故で死亡した人の致命傷



用していなかった人が死亡する割合は着用していた人の約2.2倍に上るとい

民間団体「自転車ヘルメット委員会」が全国の約1万人を対象としたインターネット調査（20年に実施）では自転車乗車中のヘルメットの着用率は11%だった。

16日に息を引き取った。ショックからしばらく仕事も休み、家に閉じこもった。娘の後を追おうと考えたこともあった。

「悲しませないで」亡くなってから1年ほどたった頃、警察から「体験を語ってもらえませんか」と依頼があった。子どもが犠牲になる事故が各地で起きていた。「こんなつらい思いをする人が少しでも減らな

ってくれれば」。そんな思いで引き受けた。「自分の命は自分で守って」「大切な人を悲しませないで」。小中学校や大学などで児童や学生たちに繰り返し語った。講演の回数は9年で100回を超えた。

講演には必ず、あの写真を持って行く。「お母さん、前を向いて」。そう言っているような気がするから。